

第三次世界大戦2

連合艦隊出撃す

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

插
画
安
田
忠
幸

目次

プロローグ	11
第一章 アンダマン海	17
第二章 外相・国防相会議	39
第三章 マラッカ海峡航空戦	65
第四章 情報工作船	92
第五章 脱出路	118
第六章 ステルス・グライダー	146
第七章 クアテロン礁	174
第八章 パールハーバー奇襲	203
エピローグ	216

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうべい
土門康平 一佐。ようやく昇進したことで、浮かれ気味。部下には辟易とされている。

〔原田小隊〕

はらだたくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお
水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだいき
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあやか
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。コードネーム：マカルー。

うるしぼらたけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チエスト。

いいかける
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

みどうそうま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこうじ さねあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：ボーンズ。

かわにししまきふみ

川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ

由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

おだぎりしろう

小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびるあきら

阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばねたくま

赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あまりひろし

甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田拓海一尉の同期。

〈陸上自衛隊 西部方面普通科連隊 (WAiR)〉

しばひかる

司馬光 二佐。西方普通科連隊付き教官。朝霞で婦人自衛官の教育に当たれば一佐に昇進させてやると言われているのだが……。

〈第一ヘリコプター団〉

きたぎとみのる

北郷稔 陸将補。

かどくらしげのぶ

角倉重信 一佐。高級幕僚。

いそがいたくや

磯貝拓也 一佐。副団長。

むらたもりと

村田護人 三佐。村田家次男。

むらたりんこ

村田凜子 一尉。村田護人の妹。明野で偵察ヘリに乗っていた。

《海上自衛隊》

〔海上幕僚監部〕

うえすぎしんご

上杉慎吾 海将。海上幕僚長。

〔航空集団〕

ねぎまさはる

根木雅晴 海将。航空集団司令官。

おかだやすし

岡田靖 海将補。航空集団幕僚長。

〔南支派遣艦隊〕

たかとおまさや

高遠雅也 海将補。南支派遣艦隊司令を務める。

そめやとしお

染谷俊雄 一佐。首席幕僚。

ばんどうかおと

板東兼人 一佐。“かが”艦長。

かわさか

兼坂すみれ 二佐。艦隊情報幕僚。

〔第七航空隊〕

^{ふじわら みさ}
藤原美沙 二佐。岩国基地第九一航空隊司令。回転翼パイロットとしてスタートし、後に双発に転じ、海自初のジェットであるU-36 Aのライセンスももつ。

^{まじまけい こ}
真島恵子 二佐。整備中隊を率いる。

^{くまかわたかし}
隈川隆 三佐。第七飛行隊副司令。

〔インド洋派遣艦隊〕

^{えがわとし き}
江川俊樹 海将補。

^{たけうちこうすけ}
竹内幸輔 二佐。作戦幕僚。

〔ヘリ搭載護衛艦“ほうしょう”〕

^{いずみ だ せんえい}
泉田宣泳 一佐。艦長。

^{はしぐちはじめ}
橋口肇 二佐。副長。

^{みやぎ あすか}
宮城明日香 一尉。気象班長。

〔第一潜水隊群第三潜水隊〕

^{みくりやみお}
御厨 峰男 一佐。

^{なかがわたいぞう}
中川太蔵 二佐。そうりゆう型潜水艦“けんりゅう”（四二〇〇トン）艦長。

//// アメリカ //////////////////////////////////////

《アメリカ合衆国大統領行政府》

エリザベス・ケンジントン 大統領。

ケイティ・ヘンドリクセン 国務長官。

コリン・コンラッド 大統領首席補佐官。アマンダ・マクノートンの上司。

アマンダ・マクノートン 新補佐官。安全保障問題担当次席補佐官から国家安全保障問題大統領補佐官へ就任。

クインシー・ショー ホワイトハウス広報室長。

トム・ハワード IT長者。大統領の西海岸での最大の支援者。“ドラゴン・スカル”^{ドラゴン・スカル}の湯国慶襲撃に巻き込まれ、娘が即死、妻は脊髄を損傷し半身不随となった。

中国

《中央弁公庁》

ファンシュエマオ
範 宇毛 中国共産党中央弁公庁主任。

〈陸軍〉

ウェイリイシイ
章 立新 少将。

ロンブワンフエイ
龍 鵬 飛 少佐。世界の奇襲戦法が専門。日本のアニメオタク。

〔第一〇八特別監察旅団〕

ウビン リンカン
武 彬 林剛の元上官。彼をスカウトした。

リンカン
林 剛 中佐。

タオ ツ モ
陶 子 黙 一級軍士長。

〔第一〇一待機旅団〕

イエシユイトン
葉 旭 東 少将。

トゥ ツ チイエン
杜 子 健 大佐。参謀長。

チワンチュウオファン
程 卓 凡 大佐。政治将校。

リニイチイチイアン
呂 志 強 海軍予備役大佐。“シー・オブ・カシオペア”（一二五〇〇〇トン）船長。

スットン
蘇 桐 中佐。情報参謀。

ツァイムウチン
蔡 慕 青 中佐。女性部隊を纏める。

〈空軍〉

ファンシン
方 星 中佐。優秀な戦闘機パイロットだったが、数年前結核に罹り、それを機会にコクピットを降りていた。

ハオ ス
郝 思 中佐。護衛の戦闘機部隊を率いる。

シンガポール

クー・シェンロン 国防大臣。若く野心家で知られる男。

ウン・テクバ 外相。議会の古株で、滅多に感情を表に出さない男。

ヤオファンファン
姚 芳 芳 クー・シェンロン国防大臣の妻。香港人で元民主運動家。

第三次世界大戦2 連合艦隊出撃す

プロローグ

不幸なエスカレーションは、意図された結果ではなく、偶然の所産^{しよさん}だった。

まず、アメリカに潜入して逃亡犯を追っていた中国の人民税務特殊部隊が、ビバリーヒルズの高級ブティック街であるロデオドライブでアメリカ市民を巻き添えにした銃撃戦を引き起こした。その結果、合衆国大統領の支援者だったIT長者の一人娘を死なせることになる。

そこから、米中関係は一気に緊迫化した。

外交的な報復合戦は、やがて中国による北米大陸への大規模なサイバー攻撃へと発展。電力網をダウンさせたことでインフラも破壊され、ケネデ

イ国際空港で日米英三方国の民間航空機が絡む大事故を引き起こす。これで、一〇〇〇人を超える乗員乗客が犠牲となった。

合衆国政府はここに至り、中国への軍事報復を決断。上海にあったサイバー戦部隊の司令部を、B-2Aステルス爆撃機の編隊で爆撃するよう命じた。

また時を同じくして、南シナ海でスタートした南アジア条約機構^{SATO}による南沙海域^{なんさ}での合同パトロールでも、大規模な戦闘が繰り広げられる。

上海爆撃の報復として、埋め立てられた南沙のリーフから地対艦ミサイル攻撃がなされると、海

上自衛隊が急いで装備したF-35BSTOVL垂直離着陸戦闘機でこれを迎え撃ち、全弾を叩き墜した。またそこで、発射基地に一番近い場所にあったフィリピン海軍の哨戒艦が艦隊の指揮下を離脱すると、勝手に機関砲で反撃。中国軍が築いた要塞を、火の海に変えていった。

これは、ロデオドライブ・ゲートと呼ばれる銃撃戦から、およそ一年後の出来事だった。

SATO艦隊を指揮する南支派遣艦隊司令の高遠雅也海将補は、いずも型護衛艦かがが(二七〇〇トン)の旗艦用司令部作戦室にいた。

フィリピン海軍が攻撃を開始してから、一五分が経過している。

戦場は完璧にコントロールしているつもりだった。中国軍が仕掛けた攻撃に対しては、圧倒的なパワーで抑え込み、双方にさほど犠牲者を出すこ

となく敵を沈黙させた。それなのに、たった一隻の、二〇〇〇トンもない哨戒艦がこれを台無しにしようとしている。

嫌な予感があったのだ。

ここミスター礁は、過去に中国がフィリピンから奪った場所。基本的に、係争地の沖合いを通過する時は、その係争当事国の艦艇を艦隊の外側に配置し、不測の事態を避けるという方針を打ち出している。だが、それでは母国の理解と支持が得られないという訴えで、特別にフィリピン海軍の艦艇を岩礁側に配置していたのだ。

結果は、合同パトロールがはじまった途端、こられた。

今にして思えば、こうなることは避けられなかったのだろう。

つい先日、中国の武装漁船からフィリピンの漁船が攻撃を受けて、死者が出ていた。この報復と

してフィリピン海軍が武装漁船を追いかけ、機銃掃射を仕掛け、撃沈したばかりだった。今回、ちよっかいを出したのは、まさにその当事者だ。

中国が報復行動に出ないわけがなかった。こちらの守りは鉄壁で、中国軍が手出しする余地を無くすことで報復攻撃を抑止できるはずだった。

だが、中国は飽和攻撃と呼ぶには不十分な数でのミサイル攻撃を仕掛け、こちらはその全弾を叩き墜した。際どいところはあったが、新装備のF-35Bステルス戦闘機が大活躍してくれた。

本来なら、双方の戦闘はここで終わるはずだったのに、フィリピン海軍は指揮下を離脱し、勝手に反撃しはじめた。

フィリピン海軍に配備されたばかりのオタゴ級哨戒艦、ホセ・リサルグ（一六〇〇トン）は、機関砲しか装備しない。逆に中国側は要塞化されているとはいえ、こちらからの攻撃を予期してい

なかった様子で、機関砲攻撃は十分すぎるほどの威力を発揮した。たちまちミサイルが爆発し、弾薬庫に火が回り、施設全体を炎上させるほどの勢いだった。

ホセ・リサルグは、弾薬が尽きたのか、やっとな攻撃を止め沿岸部から離脱しようとしていた。

「ホセ・リサルグを離脱させろ。的になるぞ……」

F-35Bの電子光学照準システムが基地の斜め上空から撮影したライブ映像を、大型スクリーンに映し出す。

「それはいいですが、責められませんよ。彼らのこと」

首席幕僚の染谷俊雄一佐が、硬い表情で告げた。「狙われたのは、ホセ・リサルグです。しかも、中国軍は次弾発射の用意をしていた。一点の曇りなく、純然たる正当防衛であり、国際法上も疑義

を挟む余地はない」

「中国軍機の動きに注意しろ。必ず報復攻撃を仕掛けてくるぞ。戦闘機は、ミサイルや燃料が少ない順から着艦させ、ただちに上げてくれ」

「アイ、司令！ 飛行長、了解です——」

飛行管制ブリッジから、F-35部隊を率いる第七航空隊司令の藤原美沙二佐ふじわらみさの声が返ってきた。

さらにスキャン・イーグル無人偵察機が発射され、黒煙を上げるミスチーフ礁へと真っ直ぐに飛んでいく。

こちらの味方機は、イギリスから購入したF-35Bステルス戦闘機だ。一九機全機が上空に上がっている。パラワン島に展開していた航空自衛隊のF-15Jイーグル戦闘機六機は、後方に控えていたが、今は中国軍の反撃に備えてミスチーフ礁の西方空域へと前進していた。

対して中国側は、ミスチーフ礁基地に配備され

ていた分を含めて、J-10A（殲撃10）戦闘機とフランカー戦闘機をコピーしたJ-11（殲撃11）戦闘機六機が上がっていたが、緒戦で切り札のJ-11戦闘機四機をこちらに叩き墜され、全編隊が近隣の基地上空へと後退していた。

中国軍の戦闘機部隊は、開戦直前まで堂々とこちらの艦隊の真上を飛んでいたが、まるで蜘蛛の子を散らすように去っていった。全機、空対空装備で飛んでいる。おそらく、艦隊を攻撃できるような装備を持たなかったせいだろう。

基地施設の真上を飛ぶスキャン・イーグルの赤外線映像が、スクリーンに映し出される。中国が豆粒のような岩礁を埋め立て、滑走路まで作った要塞基地が炎上していた。

ここは元はフィリピンが占領していたが、一九五五年、米軍がフィリピンから撤退した直後に奪われた。ただし、満潮時には水没するため、国

際法上「領土」と認められることはなかった。

だが今や、広大な面積を持つ陸地に化けている。その陸上施設の方々に火の手が上がり、爆発が繰り返されていった。

滑走路上に航空機は無かったが、近くに止まっていた燃料タンク車が爆発し、滑走路を破壊していた。一見無傷なのは管理棟くらいだが、これも壁は穴だらけ。弾薬庫からは黒煙が上がり、対空ミサイル陣地も派手に燃えていた。

発電施設にも火が回ったらしく、一番派手に黒煙を上げているのはそこだった。

ろくな消火設備も無いのか、兵士らは風下側の滑走路端の陸地へと逃げて熱気に耐えているようだ。

「ここで消火の手伝いを申し出るのは、野暮やぼつてもものだろうな……」

「そもそも、近寄れませんよ。何が誘爆するかわ

かったものではありません。東京には、どう報告します?」

「ありのままを、報告するしかないだろう。フィリピンのテレビで、おらが戦艦が大活躍して中国軍を蹴散らした! などと、勇ましいニュースが流れる前に、正確な情報を政府に報告しとかないと……まんまと、やられたな。あの艦長、なかなか侮あなどれないぞ」

高遠は、映像を多目的ルームに陣取る各国海軍の代表らにも見せるよう命じた。

そして「ご意見は?」と、アメリカ海軍のSATO艦隊参謀マイケル・ゴトー海軍中佐に尋ねる。

中佐は、「何も——」とあきならめ顔で応じた。

「遅かれ早かれ、この事態は避けられなかった。

先に手を出したのは、明らかに中国側です。先にミサイルを撃ってきたのはあちらで、こちらは抑制的な反撃に留めた。中国軍の戦闘機全機を撃墜

できたのにしなかったし、主砲で要塞を更地にできたのに、それもしなかった」

「結果はそう変わらないけどね」

「中国軍が、他の岩礁基地を失うことを恐れるなら、これ以上の拡大はないでしょう」

「本当にそう思うかね？」

「希望的観測というやつです。でも、よかったんじゃないですか。ある意味、フィリピン軍が汚れ役を引き受けてくれた。日本は、道徳的にも優位に立てるじゃないですか」

「戦略的戦術的にも、そう言えればいいんだけどね。ここに、米空母はいないから」

「私が乗っているのは、紛れもなくヘリ空母で、イギリスから買った空母だって実戦経験を積みつつ接近中ではありませんか。長い雌伏しふくの時を経て、いよいよ再生日本海軍が独り立ちする時を迎えたのだと思ってください」

イギリス海軍が手放して日本に貸与してくれた新造空母が、現在、これもイギリスからF-35B戦闘機や戦闘ヘリを満載してインド洋を日本へと向かっていた。

途中、中国の意を受けたパキスタン空軍戦闘機の攻撃を受けたものの、搭載していた戦闘機で応戦し、辛くも撃退している。まもなくマラッカ海峡を通過して、南シナ海に入るだろう。

だが一方で、アメリカの空母機動部隊の姿はそこに無かった。

サウジアラビアの王政がついに斃たおれ、アメリカは、サウジに武器を売りまくったヨーロッパ各国と一緒に、その後始末に追われている。

最新鋭の武器がイスラムのテロリスト勢力の手に渡ることを阻止そしするため、自分たちが築いた軍事基地の破壊に追われていたのだ。

第一章 アンダマン海

イギリス海軍が配備を予定していたクイーン・エリザベス級航空母艦の二番艦 プリンセス・オブ・ウエールズ（七〇六五〇トン）は、計画時点から売却の噂が絶えなかったが、結局、表向き貸与という形で日本に売却された。

その空母に搭載される予定だったF-35B戦闘機の一部と、モスボールされていたアパッチ戦闘ヘリと一緒に。

海上自衛隊は、それら荷物を満載した空母を受け取るため、ポーツマスに隊員を派遣し地中海まで迎えるの護衛艦二隻も出した。

事態は風雲急を告げ、海上自衛隊は搭載する戦

闘ヘリに乗せるパイロットと整備士を、アフリカはジブチの海自基地まで派遣。インド洋上で合流させた。

だが、パキスタンが中国製戦闘機を用いて空母を撃沈するらしいという情報を得たことで、急遽、ヘリ・パイロットを、搭載していたF-35Bに乗せて、パキスタンの攻撃部隊を撃退した。

海上自衛隊の区分では、それは空母ではなく、あくまでもDDH——ヘリコプター搭載護衛艦という扱いだったが、この空母 ほうしよう は、二隻の護衛艦に守られながらインド洋に別れを告げ、スマトラ島北西端のバンダ・アチエ沖に達し

ていた。これからアンダマン海へと入り、いよいよマラッカ海峡へ向けて南下することになる。

インド洋での空戦から、すでに二日が経とうとしていた。この二日間も、彼らは戦闘機に乗り、艦隊の上空警戒に当たっていた。

日中繰り広げられたミスチーフ礁での戦闘の様子は、海軍統合火器管制対空システムでつぶさに見えていた。ワンサイド・ゲームだったが、それでも、こちらにF-35という切り札が無ければ難しかっただろう。同じ数のF-15Jイーグル戦闘機で、あの至近距離からのミサイル攻撃を即応して阻止できたかどうか疑問だ。

ほうしようが、マラッカ海峡を抜けてSATO艦隊と合流するにはまだ二日はかかる。それまで、この空母を守り抜かねばならないが、パイロットも整備クルーも疲労困憊だった。

日没を待ってから、ほうしよう艦隊はアン

ダマン海へと入った。

マラッカ海峡へと向かうタンカーや貨物船が数珠繋ぎになっている。彼らはその存在を秘匿するため、全ての舷灯を消し、民間船舶と同じ船舶用レーダーのみを動かして航海していた。付近の船舶には、大型タンカーにしか見えないだろう。

対空警戒は、随伴する二隻の護衛艦に委ねている。海賊が出没するエリアまではまだしばらくある。それに海賊対処はさほど心配はいらない。こちらは、戦闘へりを搭載しているし、陸自の特殊作戦群の一個小隊も乗っている。

その特殊部隊の彼らも四眼の暗視ゴーグルを装備し、ここ数日、夜間の見張りに貢献してくれていた。

だが、この辺りは中国本土から近い。往復四〇〇キロもなく、中国本土の南西基地から飛び立てば、ミャンマー領空を抜けて、爆撃機を往復

させるに十分な距離だ。空中給油機を同行すれば、戦闘機も往復できる。

事実、パキスタン空軍は、インド洋での攻撃をその距離でやってのけていた。

現在は、艦隊は搭載するF-35B戦闘機一機を空に上げて上空警戒中だった。単独飛行はさせないことが空対空戦闘のセオリーで、まして夜間飛行だ。危険だが、パイロットや整備士の疲労、搭載している整備パーツの数を考えるとやむを得ない。この後、無事に南シナ海に入ってからが本番なのだ。

航海用艦橋の後ろ、船体のほぼ中央に聳える飛行管制用アイランドを、インド洋派遣艦隊司令の江川俊樹海将補が登って、飛行管制ブリッジに姿を見せた。

そこには海目の乗組員が数名と、陸自から派遣された、本来、戦闘ヘリのパイロットを務めるは

ずだった飛行隊を率いる三佐が一人陣取っている。

その三佐——村田護人は、飛行長のカバーがかけられたシートに腰を下ろしていた。

「御用なら、出向きましたのに」

赤い暗視照明の下で、村田が声をかけてくる。

「いや、君らはお疲れだろうと思ってね。異常は？」

「ありません。トランスポンダは生きていますので、機体の位置や大凡の速度は把握しています。タイとミャンマー国境沖ぎりぎりを飛んでいます。本艦からの距離は、凡そ四〇〇キロ。あと一時間飛んで交替します」

「なるほど。どこのレーダーにも映っていない？」

「はい、見えてません。ここには見えていますが……」

と村田は船舶用レーダーのモニターを指し示し

た。輝度きどを落としたモニターには、周辺を航海する民間船舶のレーダーの画像に、味方機が発するトランスポンダー情報が重ねられていた。

「それで、もし中国軍の戦闘機なり爆撃機なりが現れたら、ここから戦闘機を上げて間に合うのかね？」

「インド洋の経験から、更に二機の戦闘機の梱包こんぼうを解き、パイロットを訓練しました。五機の戦闘機は、パイロットとともに飛行甲板上で待機しています」

ブリッジから下を見下ろすと、飛行甲板の後部に、五機の戦闘機が整然と並んでいた。コクピットのキャノピーは降りている。

パイロットの姿までは見えなかったが、いつでも発艦できる状態にあることは間違いない。

デッキを監視する暗視カメラの映像に顔を上げると、コクピットの中でパイロットの頭が動いて

いるのもわかった。

「私の機体だけは無人ですが」

「君も出撃するの？」

「もし、中国軍がパキスタン軍の戦訓を汲くむなら、今回はもっと大がかりでくるでしょう。ミグCAPの一機がパッシブ・センサーで敵編隊を発見し、われわれがただちに発艦し、敵がレーダーで本艦を捕捉する直前に会敵することになります。こちらには、レーダーの火を入れた状態で迎撃するので、敵編隊は空母攻撃どころではなくならないという算段です」

「うまくいくといいがな……。もし、敵編隊の離陸が察知できるようなら、アメリカから事前に情報をもらえるだろうが、アメリカもそれぞれではなさそうだからな。期待はできない」

「南沙の状況は、どうなのですか？」

「SATO艦隊は、いったん紛争エリアから離れ

たよ。中国はすぐさま反撃に出てくるかと身構えていたが、さすがに二〇隻もの大艦隊を相手に航空攻撃を仕掛けるにはそれなりの準備が必要だと考え直したのだろう。南沙の各要塞に配置した戦闘機部隊を、ひとまず海南島^{かいはんとう}まで引き揚げさせたようだ。夕方、海幕長が記者会見で、当たり障りの無い事実関係を公表した。——ミスチーフ礁付近で航行の自由作戦を行ったところ、中国軍から対艦ミサイルの飽和攻撃を受け、これを叩き墜した。中国側に次弾発射の気配があつたため、フリピン海軍艦艇がこれに反撃。埋め立て地の要塞に若干の被害が生じた。これは正当防衛であり、われわれは事態の悪化を望まない。SATO艦隊は、いったん現場海域を離れたが、しかし、これは航行の自由作戦の中止を意味するものではない——こんなところだ」

「フリピン軍は、勝手に暴走したんですよね」

「今更、フリピン軍を悪役にはできないだろう。統制が取れていないと批難される。それに、海幕は、米側の陰謀を疑っているようだ。アメリカが日本が尻ぬぐいしてくれるからと、フリピンを嗾^{せか}けたんじゃないか、とね」

「……信じられませんね。いくらアメリカの世論が激昂^{げきこう}しているからと、中国との全面戦争を望んでいるとは思えない」

「その全面戦争を戦い抜くのが、アメリカ海軍ではなく、われわれだとしたら？ 米海軍はSATO艦隊に、ほんの一、二隻しか参加させていない。空母は中東に張り付いているし」

「私がお願ひした援軍の件で、返事はきましたか？」

「パイロットや整備員の人員増の件かね。リクエストはしたよ。検討^{けんとう}するという話だが、パラワン島からマレー半島を真っ直ぐ突っ切つても、二五

〇〇キロもある。シンガポール経由ならもう少し近くなるが、人を運ぶ術がないだろう」

「この艦には、MH-101大型ヘリが搭載されています。パイロットがいらないというなら、自分らが操縦してシンガポールまで往復してきます」

「シンガポールまで、片道一〇〇キロか。人員だけなら、十分連れて戻れるな。かがの乗員を数名派遣してもらえただけでも、楽になるだろう。その程度の余裕があることを望みたいが。早速進言してみるよ。中国軍は、今夜中に仕掛けてくるかな？」

「夜明けまでにこの艦隊は、五〇〇キロも南下します。中国も、マレーシアやシンガポールの防空識別圏を荒らしまわって仕掛けたくはないでしょう。一二時間後には、往復する距離が一〇〇キロも延びる。南シナ海で、SATO艦隊を相手に無謀な戦いを仕掛ける暇があったら、私なら持て

る全戦力を、このほうしようの撃沈に投入します」

「たった六機で、防ぎ切れるかね」

「当然、護衛の戦闘機が出てくるでしょうから、われわれが対艦ミサイルを無視して応戦しても、防げるのは二〇機程度が限界のような気がします。敵がこちらを侮り、戦力を小出しにしてくれることを望みますよ」

艦が急に取り舵を取ったため、身体が逆の右方向へともっていかれた。モニターを覗き込むと、前方に二〇ノットで向かってくる船舶が映っている。

バンダ・アチエ沖のこの海域は、半径五〇キロ圏内に常時五〇隻前後のタンカーや貨物船がひしめき合っているのだ。

艦隊は、それらと交錯こうさくすることを避けて、いぶ沖合いを航行していたが、それでもすれ違ちがう船舶

はいた。マリーン・トラフィック・ネットワークの情報だと、向かってくる船はカナダ船籍の貨物船で、バンクーバーを出発した船のようだ。

艦隊は、肉眼で目撃されることを避けるためにさらに沖へと針路を変えた。

相手のリーダーにもこちらは映っている。手持ちぶさたな誰かが、ネットワークに情報が無い大型船舶だと気付くかもしれない。

ベテランの船乗りならば、軍艦だとすぐ察するだろう。

ここからマラッカ海峡を抜けるまでは、一〇〇〇隻前後の船舶とすれ違うことになる。

その三分の一は、中国船籍の船だ。明るくなるまでは、なるべく正体は隠したかった。

中央軍事委員会が入る「八一^{パイクアタロウ}大^{ロウ}楼^ウ」がある北京^{ペキン}

市長安街。人民革命軍事博物館に近い六階建てのビルに入る第一〇八特別監察旅団の司令部では、二階奥にある武彬^{ウッピン}大佐のオフィスを、六階の住人の龍鵬^{ロンブン}飛^{フレイ}少佐が訪ねてきた。

「珍しいな、少佐。こちらから呼んでも、浮かない顔で嫌々^{いやいや}現れる君が、自ら顔を見せるなんて」
大佐は、笑いながら少佐を出迎えた。大佐の右手には箸^{はし}が握られている。

「お邪魔でしたら、アポを取りますが」

そう言いながら少佐は眼鏡^{めがね}を外すと、タオル地のハンカチでこめかみから流れる汗を拭く。

「とんでもない。晩飯を食べていただけだ。君も一緒に喰うか？ 食堂から持ってこさせるぞ」

「ありがとうございます。ですが自分は、上でハンバーガーを食べたばかりですので結構です」
「では、コーヒーを持ってこさせよう」

大佐は副官に、コーヒーを煎^いれるよう命じた。

応接セットの隣にあるテレビ・モニターでは、NHKの映像が映っていた。

中国本土では、午後から全く海外テレビは映っていない。党と政府、軍の中でも、特別な部局だけが視聴を許される修正無しの映像だった。

「南沙のニュースが流れたのですか？」

「ああ、日本語はわからないが、情報はフィリピ
ンから漏れたらしい。うちの基地を砲撃して破壊
した、と。それを米側が追認し、日本側が状況を
国民に説明した。まあ、海軍から聞いている話と、
だいたい合っているよ。提督連中は、日本側の攻
撃をいささか大げさに言い立てたようだが」

NHKでは、夕方にあつた海幕長の記者会見の
模様をくり返し流している。

「何か新しいニュースはありそうかな」

日本語をアニメで覚えたという龍少佐は、しば
らくニュースを聞いて「いえ、特になさそうです

ね」と応じた。

副官がコーヒーカップを応接セットに置くと、
少佐は、砂糖を三杯も入れた。それを見た大佐は
眉を顰める。

「余計なお世話かもしれないが……君のその体型
だと、砂糖などの甘い物は、控えた方がいいんじ
やないか？」

「とんでもありません、大佐！ 糖分不足は、よ
くありません。思考が鈍ります!!」

少佐は、ドバツと砂糖を入れたコーヒーを、立
ったままほんの三口半で飲み干した。

「……マリン・トラフィックのデータを見るか
ね？ 例の作戦の船団は、すでに太平洋へと抜け
たよ」

「早いですね。0号船はどうですか？」

大佐は、パソコン画面に情報呼び出した。

「ハワイ島沖にいる。船会社が、ハワイ州政府か

らメールをもらったそうさ。向こうで発信されたのは深夜だから、あちらもいろいろ揉めたのだからな……。それによると、両国関係は今現在厳しい状況にあるが、人的交流を遮断するのは賢明な判断とは言えず、ましてや補給が必要な客船の入港を断るのは人道上も相応しくない。われらハワイ州民は、貴船の入港を歓迎するとともに、ハワイ州民との間に友好を深め、米中の架け橋ならんとすることを希望する、という話だ。向こうも、金は欲しいだろう。米中間の航空路が途絶えた今、二〇〇〇人からの観光客が上陸して、買い物をしてくれるんだ。ただでさえ州経済が大打撃を被っている時に、断れるはずもない。明日朝一でハワイ島に入港し、火山観光を楽しみ、オアフ島へと向かうことになるだろう。——党からは、作戦を急げと言ってきている。前倒しの案を出さなければならぬ」

「船舶移動ですよ。飛行機で飛んでいくのとはわけが違います」

「では、たとえばオアフ、ハワイ両島での同時作戦はいったん諦めて、オアフ島のみで作戦に集中するとかはどうだ？」

「感心しません。アメリカに、反撃の拠点をみすみすくれてやるようなものです」

「そのことは明日の朝、もう一度再検討しよう。党は前向きな判断を求めている。それで、君の用事は何だったんだ？ いや、たまには世間話をしにきてくれるだけでも嬉しいがね」

大佐は、本気でそう言っているという顔をした。「失礼しました。自分の用件ですが、実は、日本のSNSを何件が読んでいて、気がかりな書き込みを発見したのです。パキスタン空軍が、イギリス製空母に攻撃を仕掛けた様子ですが、詳細の報告は届いていますか？」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。